

夏期日本語教育コース再考

プレースメント・テスト及びプロダクション・テストの分析から

田 中 真 理

キーワード：夏期日本語教育、プレースメント・テスト、プロダクション・テスト、Pre-Intermediate コース、漢字コース、漢字圏・非漢字圏学習者

〔要旨〕 本稿の目的は、国際基督教大学1994年度夏期日本語教育（S C J L）におけるPre-Intermediate（P I）コース及び漢字関係コースについて分析し、S C J Lのコース・カリキュラムを再考することである。

S C J Lには例年、本国で初級文法の学習は終えているがその定着が悪く、かつ四技能のバランスがとれていないP Iレベルの学習者が多く集まる。また、S C J Lは歴史的には非漢字圏の学習者が中心であったが、近年漢字圏の学習者も増えてきている。しかし、このような点に対してまだ十分対応できていないのが現状である。

そこで、本稿では、プレースメント・テストの下位テストであるComprehensive Test（COMP：読解・文法テスト）及びプロダクション・テスト（絵を使用した文生成テスト）のデータの比較を行い、P Iレベルについて分析を行った。その結果、P IレベルではCOMPの得点に比べ文生成力が低く、四技能の能力がアンバランスであることが明らかになった。また、プレースメント・テストを漢字圏・非漢字圏学習者別に分析したが、P Iレベルで両者の差が最も大きかった。

一方、他の日本語能力に比べ漢字力が低い学習者を対象とした漢字関係コースでは、P Iレベルではバランスの悪さを克服できないようであったが、上級レベルでは目標が明確になりよい結果をもたらした。

以上の考察により、今後S C J Lにおいて、P Iコースでは不得手な技能を中心としたクラス編成の検討、また漢字コースのみならず全コースを通して漢字圏・非漢字圏という点からの検討が必要だと思われる。

1 はじめに

国際基督教大学夏期日本語教育（以下S C J L）は、現在同大学日本語教育研究センター（以下センター）によって運営されているが、このS C J Lの前身、夏期日本語講座

は1973年に始まっており、サマーコースとしては22年の歴史を持つ。伝統的には非漢字圏からの参加者が多かったが、近年では参加者の国籍や背景も多岐に渡り、新たな問題ももたらしている。また、この夏期日本語講座は長らく大学の正規のプログラムではない独立したプログラムであったが、センターの発足に伴い1990年度より夏期日本語教育と名称を改め大学の正規のプログラムとなった。今年度はセンター発足5年目に当たり、SCJLのコース・カリキュラムも再考する時期に来ていると思われる。

一般的にサマーコースには本国で初級を修了しているがその習得が十分でない学習者や四技能のアンバランスな学習者が多く集まる。したがって、サマーコースは日本で初級から学習を始める学習者を対象とする教育とは異なった問題を持つことになる。本SCJLではPIコース（Pre-Intermediate：中級準備コース）がそのような学習者を対象にしている。また、SCJLでは、通常の学期にはない、漢字学習に重点を置いた漢字コースが伝統的に開講されてきたが、漢字学習を希望する学習者の背景の多様性や漢字力の差の大きさへの対応も問題になってきている。

さらに、SCJLでは、これらの学習者を含め総数約130名の学習者をプレースメント・テストによって8コース（一部のコースはさらに複数のクラスに分かれる）に分けているが（注1）、例年コース移動が激しく、今年度も27%近くの学生が移動している。したがって、そのプレースメント・テストが果して妥当であるのか検討する必要もある。

そこで、本稿では、1994年度SCJLのプレースメント・テスト及び新しく行ったプロダクション・テストのデータを用いて、SCJLに特有な上記二つのコースについて分析し、今後のコース・カリキュラムを検討してみたい。さらに、プレースメントに関しても、現行のプレースメント・テスト、判定法が増加しつつある漢字圏学習者に十分対応できているのかどうか検討を試みたい。

2 背景

2-1 コース・カリキュラム

国際基督教大学（以下ICU）では、通常の学期の日本語教育は語学科日本語教育プログラム（以下JLP）によって運営されている。JLPは秋学期に始まり、冬学期、春学期と進んで夏期休暇前に1年が終わる。SCJLは、この夏期休暇期間中に、秋からJLPに入る予定の学生（4年本科生、1年の交換留学生等）と日本語学習を目的として夏期間のみ来日する一般の学生を対象に行われる6週間の集中コースである。

1994年度のSCJLの開講コース及びクラスは〔表1〕のとおりである。通常の日本語教育プログラムであるJLPの開講コース（秋学期及び冬学期）と比較するとサマーコースに特有なコースが明確になるだろう。

まず、1週間の授業時間数としては、SCJLでは50分1コマの授業が毎日4コマ、週20コマ行われている。それに対し、JLPでは、初級、中級コースは週22コマ（1コマ70分）のINTENSIVEコース系と週10コマ（1コマ70分）のSEMI-INTENSIVEコース系に大きく分かれている。後者をJAPANESEコースと称し、SCJLのコースはこれに準じている。

SCJLとJLPの開講コースの違いの第1点としては、SCJLではJLPのJapanese 1（J1）に対応する初級1（BASIC1）がここ数年開講されていない。第2点としては、SCJLには初級3（BASIC3：以下B3）と中級1（Intermediate1：以下I1）の間に中級準備コース（Pre-Intermediate：以下PI）が設けられているが、これはJLPにはない。夏期コースにおけるPIの必要性が指摘され1992年度から開講されている。そして、PIコースは、昨年度から漢字重視のクラスと文法重視のクラス、読解、口頭発表を重視するクラスというふうに技能別のコース編成になっている。さらに、SCJLにあってJLPにないものとしては上級者向けの「特別漢字コース」とビジネス日本語を学習するCIBERコースがあるが、漢字コースに関してはJLPでも1994年度からほぼそれに相当するコースが秋学期のみ開講されるようになった。

CIBERコースはCenter for International Business Education and Research のプログラムに属する特定の2大学のMBAコース在籍の学生のみを対象としたコースであり、

[表1 SCJL及びJLP開講コース]

1994年度SCJL		JLP秋学期		JLP冬学期	
—		J1	Int. I	—	—
B2		J2		J2	
B3		J3		J3	
PI	a (漢字)	—	—	—	—
	b (文法)				
	c (読解・発表)				
I1		J4	Int. II	J4	Int. II
I2		J5		J5	
I3		J6	—	J6	Int. III
ADV.		ADV. I		ADV. I	
		—		ADV. II	
特別漢字		漢字と読み		—	
CIBER		—		—	
—		特別日本語 I		—	
—		—		特別日本語 II	

一般の学生は応募することができない。上級コースに関しては、通常の学期ではADV. I とADV. II、及び外国語としての日本語学習を免除されるレベル（注2）に分かれるが、SCJLの上級コースはADV.1以上の学生すべてを対象としている。

2-2 プレースメント・テストとプロダクション・テスト

SCJLにおいても通常の学期と同じようにコース開講の最初にプレースメント・テストが行われる。SCJLのプレースメント・テストはJLPと共通で、COMPREHENSIVE TEST（以下COMP.）、READING WRITING & VOCABULARY TEST（以下RWV.）、AURAL COMPREHENSION TEST（以下AURAL）の3つの下位テストからなるマークシート式のテストである。コンピュータで処理されるが、最終的なコース判定は、各コース、クラスのヘッドの教師で構成される判定会議においてなされる。今年度、SCJLでのコース判定に正式に使用したのは従来のプレースメント・テストであるが、新しい試みとして同時にプロダクション・テストを行った（〔表2〕参照）。前者のプレースメント・テストが多肢選択式のテストであるのに対し、プロダクション・テストは実際に漢字を書かせたり、絵から文を作らせたりする記述式のテストである。今年度は、このプロダクション・テスト（漢字10問、構文10問）をレベル判定会議及びコース変更の際の補助資料、参考資料として用いた。構文のプロダクション・テストは田中、館岡、田部井（1994）及び田中（1995a）の研究をもとに、SCJL用に開発中のものである。今年度のプロダクション・テストも、筆者の担当は構文のプロダクション・テストの作成、分析なので、本稿での考察は構文のプロダクション・テストに限ることにする（注3）。

3 研究の目的と方法

本稿の最終的な目的はSCJLに特有なコースであるPIコースと漢字関係のコースを分析し、コース・カリキュラムを検討することである（〔表1〕の斜線部）。方法としては、プレースメント・テストと構文のプロダクション・テストの分析結果を使用し、具体的には以下の（1）～（5）の手順で行う。

（1） プレースメント・テストと構文のプロダクション・テストについての一般的な分析を行う。

（2） プレースメント・テストのCOMP.とプロダクション・テストの関連（相関）について検討する。

（3） プロダクション・テストに関しては、SCJLの最初に行ったテストと6週間後に行った再テストの結果を比較する。

(4) プレースメント・テストに関しては、さらに漢字圏学習者と非漢字圏学習者別に分析を行い、問題点を検討する。

(5) 上記(1)～(4)の分析、考察を通して、SCJLに特有なコース、つまり中級準備コース(P I コース)及びその下位コースであるP I - a (漢字に重点を置く)、P I - b (文法に重点を置く)、P I - c (読解と口頭発表に重点を置く)の3つのクラスについて、さらに漢字関係コースであるP I - a と特別漢字コースについての関連を検討し、今後のSCJLのコースカリキュラムでの位置付けを考える。

4 プレースメント・テストとプロダクション・テストの結果の分析

4-1 プレースメント・テストとプロダクション・テストの実施方法

プレースメント・テストとプロダクション・テストはSCJLの初日に[表2]に示す時間配分でA、B続けて行った。受験者は128名で、その主な母語は英語75名、中国語20名、韓国語8名等である(注4)。

[表2 1994年度SCJL プロダクション・テスト及びプレースメント・テスト実施方法]

A プロダクション・テスト			計50分
1	QUESTIONNAIRE		
2	漢字のプロダクション	10問	
3	構文のプロダクション	10問	

B 選択式のプレースメント・テスト			計115分
1	AURAL	30問	35分
2	RWV.	90問	35分
3	COMP.	67問	45分

4-2 プレースメント・テストの結果

1994年度プレースメント・テストの基本的な統計量は[表3]「プレースメント・

テストの平均値及び標準偏差」のとおりである。信頼性と下位テストの相関は〔表４〕「COMP. RWV. AURALの相関及び信頼性」に示されるとおりであり、これから見る限りプレースメント・テストの信頼性は高いと言える。

〔表３ 94年度SCJL プレースメント・テストの平均値・標準偏差〕

	項目数	満点	平均値 (100%)	標準偏差
COMP.	67	80	39.06 (48.83)	17.21
RWV.	90	90	41.52 (46.17)	19.97
AURAL	30	30	13.67 (45.57)	6.89

N = 128

〔表４ 94年度SCJLプレースメント・テスト COMP. RWV. AURALの相関及び信頼性 (α 係数)〕

	COMP.	RWV.	AURAL
COMP.	(.948)		
RWV.	.816	(.966)	
AURAL	.830	.592	(.889)

N = 128

テストの妥当性については、(1)内容的妥当性、(2)基準関連妥当性、(3)構成概念妥当性の三つに分けられるが、(1)に関しては、一応JLPで使用しているテキスト、シラバスに基づいてテストが作成されているので妥当だと言えよう。(2)に関しては、ここ数年他のテストやその後の成績との関連についての研究はなされていない。そういった点では、今回プロダクション・テストとの相関をみることには意義があると言えよう。(3)は、そのテストが何を測っているのかということであるが、今回のプロダクション・テストの結果との比較や漢字圏学習者と非漢字圏学習者の得点の比較によって、テスト作成者、実施者の期待している能力がある面においては測れていないのではないかという指摘ができそうである(後述)。

4-3 プレースメント・テストとプロダクション・テストの関係

プレースメント・テストの下位テストの一つであるCOMP.は総理解力を測るためのテストとされており、JLPでもSCJLにおいても、このCOMP.の得点を基準にクラス分けを行っている。内容的には文法問題と読解問題から成っているので、構文のプロダクション・テストの得点はプレースメント・テストの三つの下位テストのうちではこのCOMP.との相関が最も高いと予想されたが、実際の結果もプロダクション・テストの合計点とCOMP.との相関は.788とかなり高かった(後述)。しかし、Comprehension(理解)とProduction(生成/産出)は本来異なる能力だと考えられる。また、COMP.では問題文が「読める」ことが前提となっているので、COMP.の得点は漢字圏学習者の方が非漢字圏学習者より有利に出る可能性も大いに考えられる。このような点、つまり構文力が従来のプレースメント・テストで測れているどうか、また、漢字力の助けがコース分けを妨げるほどにプレースメント・テストのCOMP.の得点に影響を与えていないかという点も検討すべき点である。次に、コース、クラス別及びレベル別の学生の文生成能力とCOMP.の得点との比較、考察を試みる。

なお、以下、「プロダクション・テスト」は「構文のプロダクション・テスト」の意で使用する。

4-4 プレースメント・テストとプロダクション・テストの得点の比較

すでに述べたように、現在ICUでは学生の日本語能力レベル判定には通常の学期でもSCJLでもプレースメント・テストのCOMP.の得点を基準にしており、RWV.、AURALの得点はそのレベルに合わない学生を前後のコースに移して調整している。しかし、SCJLでは漢字関係クラスのように目的別のコース、クラスがいくつかあるので実際のコースはCOMP.の得点別のコース編成とはならない。また学生の個人的な事情によりコース移動をするので、最終決定のコースの学生のCOMP.の得点にはさらに幅ができることになる。

そこで、本稿では、最終コースの「コース別・プレースメント・テスト及びプロダクション・テスト平均値」と、純粹にCOMP.の得点で6レベルに分けた「レベル別プレースメント・テスト及びプロダクション・テスト平均値」の両方を使って、SCJLにおけるプレースメント・テストとプロダクション・テストを比較、検討することにする。

[表5]は「1994年度SCJL・コース別プレースメント・テスト及びプロダクション・テスト平均値」(N=128)である。すべての項目は100%に換算してある。

[表6]は1994年度SCJL参加者をコースに関係なくプレースメント・テストのCOMP.の得点で6レベルに分けたものである。レベルはJLPにおけるレベル判定に用いるCOMP.の得点の区分で分けている。レベル1(以下L1)がJ2に、レベル2(以下

L 2) が J 3 に相当する。以下同様で、レベル 6 (以下 L 6) が ADV. I 以上に当たるが、外国語としての日本語学習を必要としないレベルだと判定された日本人帰国学生 3 名については分析の対象からはずした。したがって [表 6] では対象 (N) は 125 名である。

[表 5] の左側は「コース別プレースメント・テスト平均値」である ([図 1] 参照)。この表を見ると、多少のコース移動後も、特殊コースである P I - a、特別漢字コース、CIBERを除き、B 2 から ADV. まで COMP.、RWV.、AURAL 共コース別平均値は順に上がっており、不自然なコース分けにはなっていない。

ここで前述の特殊コースについて補足すると、P I - a は P I コースの一つであり、漢字に重点を置いている。他の P I - b、P I - c は、各々「文法」、「読解と口頭発表」に重点を置く ([表 1] 参照)。特別漢字コースはコース名どおり漢字学習を中心とするコースである。P I - a 及び特別漢字コースの得点の特徴は、COMP.、AURAL に比較して、RWV. がかなり低いことである。例えば、P I - a は、COMP. は他の P I のクラスよりかなり高く、AURAL に至っては I 3 と同じレベルであるが、RWV. は他の P I より低い。特別漢字コースも COMP.、AURAL は ADV. に次ぐが、RWV. は I 2 より低い。この二つのコース、クラスは漢字の学習を学習者自身が希望している場合がほとんどであり、漢字が弱いから補強しようという目的で入っているようである。クラスの学生は、海外生活の長い日本人や日系人、日本滞在が長いのでコミュニケーションはできるが「書けない」外国人等である。以上を踏まえた上で、プロダクション・テストの解説、分析に移る。

4-5 プロダクション・テストの結果の分析

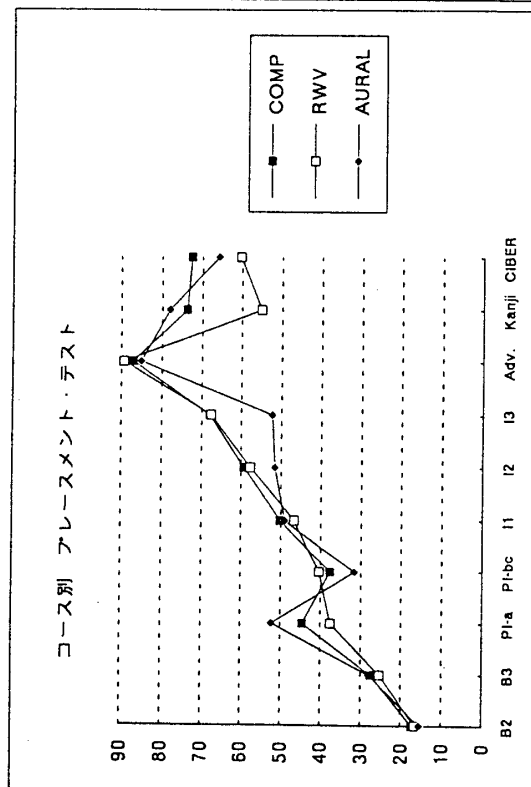
プロダクション・テストの問題文 (絵) は 10 問である ([資料 1] 参照)。それぞれの文でいくつかのチェックポイント (以下の (1) ~ (6)) を決め、そのチェックポイントがどの程度できているかを点数化したものと、(7) 10 構文全体に対する採点者の印象点と、これらの合計点 (8) が [表 5] [表 6] の右半分に出ている。チェックポイントは

- (1) 複文 (接続助詞、主節と従節の意味関係)
- (2) 複文の二つの節の視点の統一 (主としてヴォイスで判定)
- (3) 間接受身
- (4) 受益表現
- (5) 補助動詞「てしまう」の使用
- (6) 名詞節ないしは副詞節の使用

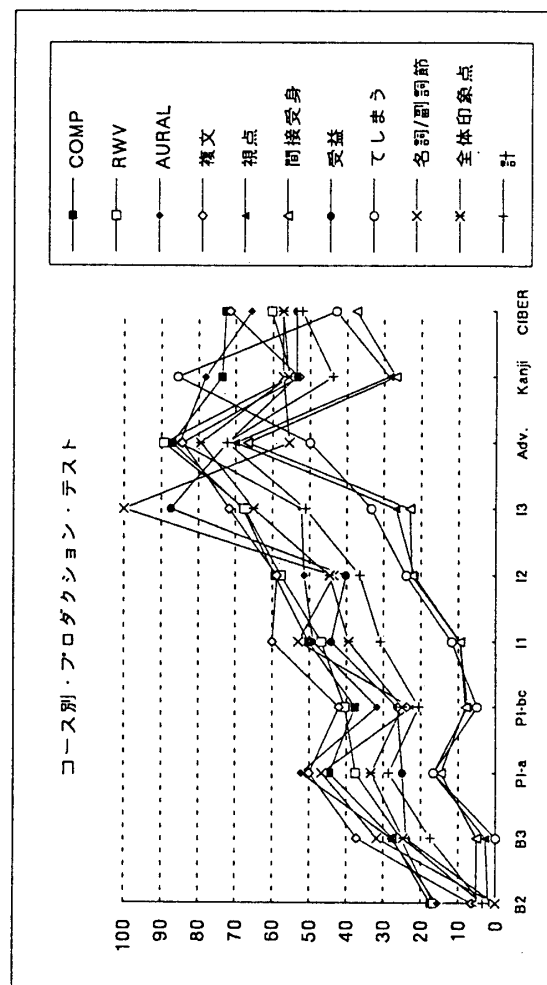
であり、各々の項目数は順に 5、5、4、2、1、1 である。項目数の少ないものは習得の度合を測るには信頼性は低くなるが、項目数を多くすると同じような構文ばかりが並ぶ

【表5 コース別・アレイスメント・テスト及びアロダクション・テスト平均値】

コース	n	アレイスメント・テスト			アロダクション・テスト							計
		COMP (67)	RWV (90)	AURAL (30)	複文 (5)	視点 (5)	間接受身 (4)	受益 (2)	てしまう (1)	名詞/副詞節 (1)	全体印象点	
B2	11	17.27	16.46	15.45	6.36	1.82	5.23	0.00	0.00	0.00	3.18	3.41
B3	22	27.50	25.30	27.86	37.27	2.73	5.11	23.86	0.00	31.82	24.55	17.45
Pl-a	6	44.58	37.59	52.22	50.00	16.67	14.58	25.00	16.67	46.67	33.33	28.58
Pl-bc	20	37.63	40.44	31.67	42.00	7.50	8.13	26.25	5.00	22.50	25.00	20.50
I1	17	50.22	46.73	49.02	60.00	9.41	9.56	44.12	11.76	52.94	39.41	30.85
I2	23	59.29	57.63	51.45	58.70	21.74	22.34	40.22	23.91	43.48	44.57	36.42
I3	6	67.92	67.59	52.22	71.67	26.67	22.92	87.50	33.33	100.00	65.00	51.08
Adv.	9	87.22	89.38	85.19	84.44	70.00	66.67	72.22	50.00	55.56	79.44	72.39
Kanji	7	73.75	55.08	78.10	52.86	28.57	26.79	53.57	85.71	57.14	55.71	43.79
CIBER	7	72.68	60.32	65.71	71.43	42.86	37.50	53.57	42.86	57.14	57.14	52.14
平均	128	48.83	46.17	45.57	50.47	17.81	17.84	37.50	19.53	40.86	38.01	31.21



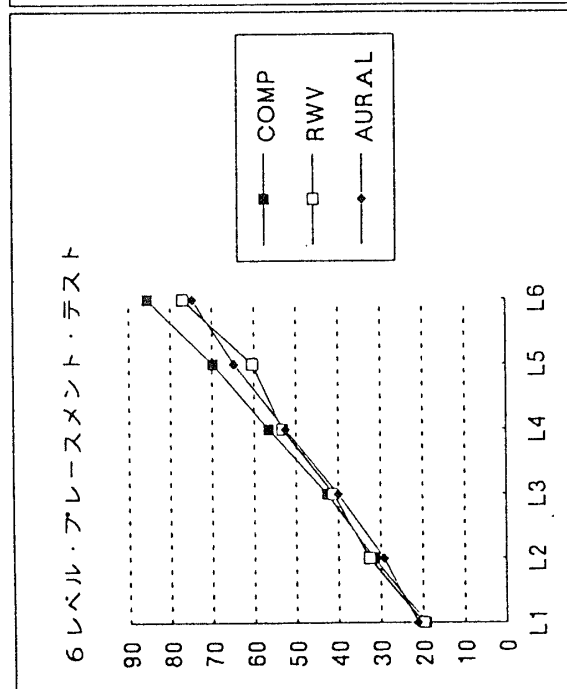
【図1 コース別 アレイスメント・テスト平均値】



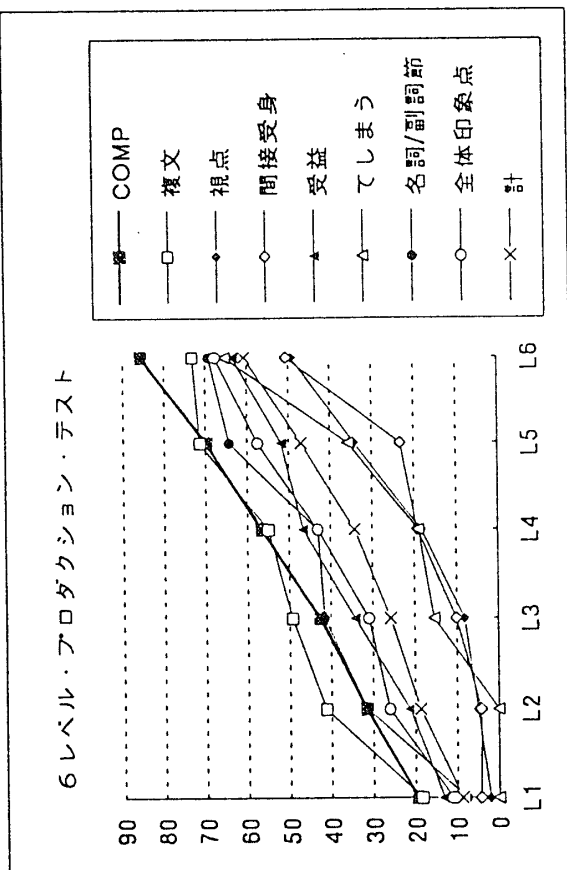
【図2 コース別 アロダクション・テスト平均値】

[表6 レベル別 アレースメント・テスト及びアロダクション・テスト平均値]

アレースメント・テスト			アロダクション・テスト									
Level	n	COMP (67)	RWV (90)	AURAL (30)	複文 (5)	視点 (5)	間接受身 (4)	受益 (2)	てしまう (1)	名詞/副詞節 (1)	全体印象点	計
(項目数)											-	-
L1	19	19.28	20.00	21.23	18.42	2.11	4.34	13.16	0.00	7.89	11.05	8.82
L2	24	31.51	32.69	29.17	41.25	5.00	4.17	21.25	0.00	31.25	26.04	18.69
L3	26	42.60	41.07	40.00	49.23	8.08	10.10	34.23	15.38	41.54	30.96	25.71
L4	29	56.47	53.22	52.53	54.83	18.28	19.18	46.55	18.97	43.10	43.10	34.18
L5	14	69.82	60.32	64.76	71.43	34.29	23.21	51.79	35.71	64.29	57.50	47.00
L6	13	85.58	77.01	74.62	73.08	49.23	50.58	63.46	65.38	69.23	67.69	60.54
平均	N=125	47.66	44.97	44.35	49.28	16.16	15.87	36.40	18.40	40.24	36.60	29.77



[図3 レベル別 アレースメント・テスト平均値]



[図4 レベル別アロダクション・テスト平均値]

ことになり、テスト問題として偏りが出てくる。この点に関しては今後検討の余地があるが、一応(1)～(8)の順で結果を見ていく。

まず、項目数が2以上ある(1)(2)(3)(4)とCOMP.との相関を見ると、コース別分析の対象であるSCJL全員(128名)を対象とした場合には、[表7]より各々0.603, 0.684, 0.599, 0.519で、レベル別分析の対象である125名を対象とした場合には、[表8]より0.566, 0.632, 0.525, 0.491である。個々の相関係数は項目数にも左右されると考えられるが、全体的に文生成能力(プロダクション・テストの得点)はCOMP.と相関があり、なかでも(2)の「複文の視点の統一」に関してはCOMP.とかなり相関があると言えるだろう。

次に、[表6]「レベル別プレースメント・テスト及びプロダクション・テスト平均値」及び[図2]を見ると、プロダクション・テストのほぼすべての項目でレベルが上がると点数も上がっている。点数の上がり方は以下に述べるように各項目によって異なる。

(1)「複文」はL1とL2の間で顕著な差があり、習得状況はCOMP.に近いカーブを示す。ただし、L5とL6ではほとんど差がなく、L5辺りで横ばいになると言える。

(2)「複文における視点の統一」に関しては、統一がとれ始めるのがL4で、その後急速に上昇するが、最終段階のL6においても50%に到達しない。

(3)「間接受身」も視点の統一と同じような傾向を示す。ただし、間接受身の場合にはL5からL6において大きく伸びる。しかし、L6においても50%程度の正答率である。

(4)「受益」はなだらかに伸びているが、L6においても63.46%であるのは問題文に問題があったからかもしれない。受益を要求する問題は2問で、そのうちの1問は二つの場面から複文あるいは連文を要求するものだが、一つの場面を抽象化・簡略化して、あるいは回避(Avoidance)のストラテジーを使って「大切な推薦状」とした解答に点を与えなかったことが影響している可能性がある(資料1参照)。問題文の指示は「絵からの情報をすべて使って」ということで作成者が期待していたのは「名詞修飾節」あるいは「副詞節」に受益表現が使用されることであった(先生に書いていただいた／先生が書いてくださった推薦状)(せっかく先生に書いていただいたのに／先生が書いてくださったのに)。日本人母語話者に行った調査では34名中30名がどちらかの節を用い、「大事な推薦状」としたのは2名であった。

(5)「補助動詞～てしまう」の使用はL1、L2は0で、L3になって初めて使われ(15.38%)、L6で65.38%となる。これは前述の推薦状に「コーヒーをこぼしてしまった／こぼしちゃった」を調べたものである。1項目なので信頼性は低いが、日本語母語話者に行った調査では、「こぼす」を使用した28名中27名が「てしまう」をつけている。

(6)「名詞修飾節／副詞節」は前述の推薦状についてである。これも「大切な推薦状」

[表7 アレースメント・テスト及びプロダクション・テスト相関関係(128名全員)]

	COMP	RWV	AURAL	複文	相点	間接受身	受益	てしまう	名詞/副詞節	全体印象点	計	学習期間	日本学習期間	日本滞在期間
COMP	1.000													
RWV	0.816	1.000												
AURAL	0.830	0.592	1.000											
複文	0.603	0.489	0.540	1.000										
相点	0.684	0.612	0.633	0.538	1.000									
間接受身	0.599	0.555	0.479	0.381	0.614	1.000								
受益	0.519	0.444	0.504	0.504	0.452	0.359	1.000							
てしまう	0.502	0.393	0.450	0.299	0.582	0.487	0.397	1.000						
名詞/副詞節	0.405	0.243	0.372	0.478	0.314	0.144	0.641	0.335	1.000					
全体印象点	0.791	0.664	0.716	0.752	0.768	0.572	0.647	0.575	0.569	1.000				
計	0.788	0.668	0.705	0.809	0.840	0.716	0.708	0.620	0.576	0.920	1.000			
学習期間	0.480	0.448	0.370	0.345	0.482	0.419	0.297	0.252	0.112	0.466	1.000			
日本学習期間	0.220	0.101	0.253	0.138	0.147	0.161	-0.006	0.147	-0.016	0.125	0.253	1.000		
日本滞在期間	0.433	0.312	0.494	0.219	0.382	0.507	0.192	0.325	0.106	0.339	0.411	0.218	0.591	1.000

[表8 アレースメント・テスト及びプロダクション・テスト相関関係(125名)]

	COMP	RWV	AURAL	複文	相点	間接受身	受益	てしまう	名詞/副詞節	全体印象点	計
COMP	1.000										
RWV	0.790	1.000									
AURAL	0.807	0.536	1.000								
複文	0.566	0.440	0.497	1.000							
相点	0.632	0.546	0.572	0.490	1.000						
間接受身	0.525	0.471	0.382	0.304	0.517	1.000					
受益	0.491	0.408	0.477	0.480	0.413	0.307	1.000				
てしまう	0.483	0.359	0.429	0.269	0.549	0.468	0.363	1.000			
名詞/副詞節	0.407	0.229	0.374	0.481	0.307	0.119	0.633	0.306	1.000		
全体印象点	0.759	0.613	0.675	0.732	0.726	0.484	0.629	0.558	0.584	1.000	
計	0.756	0.613	0.660	0.801	0.806	0.649	0.700	0.608	0.595	0.907	1.000

の場合には点を与えられていないからその点を考慮しなければならないが、「複文」より少し下の点でスタートし、その後順調に伸び「複文」と同じ様な伸びを示す。「名詞節／副詞節」は複文に含まれるものであるが、(1)の「複文」は二つの場面を接続助詞で正しくつなげるかどうかチェックポイントになっているのに対し、(6)は従節を作っているかどうかを採点の対象にしている。(7)「10構文全体に対する印象点」は意味が通じるかどうか自然な文かどうかという点から全体的(holistic)印象点を出した。各レベルから19名のデータを無作為抽出して4人の日本語教師が採点し平均.728の相関係数(α 係数.915)を得た。[表5]及び[表6]では筆者の印象点を採用している。(8)「計」は、以上のプロダクション・テストの各項目を合計したものである(配点の割合は項目数に準じる)。これもどの項目をいくつとるかによって異なるし印象点も入っているので客観的だとは言えないが、COMP.との相関は0.756([表8])であり、プロダクション・テストの得点とCOMP.の得点には相関があると言えるだろう。

このように各項目によって特徴はあるが、ほぼすべての項目がレベルと共に上がっており、妥当な結果が得られている。

4-6 プロダクション・テストの伸び

1994年度のSCJLでは、プレースメント・テストの再テストは行えなかったが、プロダクション・テストに関しては、最終日(6週間後)に再テストを行った。再テストは早く帰国した学生もいるので全員は受けていないが、受けた学生のみを対象に1回目のプロダクション・テストと再テストの結果を比較してみた。[表9]がプロダクション・テストのコース別伸びの平均値、[表10]がプロダクション・テストのクラス別伸びの平均値である。コース別の伸びの平均値を見た限りでは、自然な結果が出ている(注5)。初級の伸びが大きく、その後中級になって伸びが落ちていくが、これは初級がプロダクション・テストの文法項目をその期間に学習したから当然だと言える。例えば、B2では、授受構文が6週間の学習文法項目に含まれており、受益表現はB2が他のコースより大きく伸びている。B3では受身文(間接受身を含む)を学習した。間接受身が大きく伸びており、受身文の学習効果は視点の統一にも大きく現れている。

プロダクション・テストの伸びの合計の平均では、B3が5.87で最も大きく、それにB2の2.79、PIの2.76が続く。特別漢字コースの伸びが大きいのは、短作文の練習の効果(星野 1995)の現れかもしれない。

以上、プレースメント・テスト及びプロダクション・テストについて概観した。次に、SCJL特有の漢字関係のコースとPIコースに焦点を当てて、プレースメント・テスト及びプロダクション・テストの結果について考察する。

〔表9 プロダクション・テスト コース別 伸び 平均値〕

コース	n	伸・複文	伸・視点	伸・間接受身	伸・受益	伸・てしまう	伸・名詞/副詞節	伸・全体印象点	伸・計
B2	10	1.00	0.45	0.27	0.50	0.10	0.25	0.22	2.79
B3	18	0.28	2.11	3.11	0.17	0.17	-0.08	0.12	5.87
PI	22	0.48	0.68	0.98	0.26	0.18	0.08	0.10	2.76
I1	17	0.50	0.06	0.37	0.08	0.35	0.15	0.08	1.32
I2	8	-0.13	0.44	0.55	-0.19	0.00	-0.13	-0.05	0.50
I3	6	-0.08	0.33	1.18	-0.58	0.17	-0.50	0.17	0.68
Adv.	6	-0.17	0.17	0.97	-0.25	-0.08	0.00	0.30	0.93
Kanji	7	0.86	0.36	0.47	0.00	-0.29	0.00	0.40	1.80
平均	N=94	0.40	0.72	1.14	0.09	0.13	0.01	0.14	2.59

〔表10 プロダクション・テスト クラス別 伸び 平均値〕

クラス	n	伸・複文	伸・視点	伸・間接受身	伸・受益	伸・てしまう	伸・名詞/副詞節	伸・全体印象点	伸・計
B2	10	1.00	0.45	0.27	0.50	0.10	0.25	0.22	2.79
B3-a	12	0.71	2.29	3.17	0.13	0.25	0.00	0.23	6.78
B3-b	6	-0.58	1.75	3.00	0.25	0.00	-0.25	-0.10	4.07
PI-a	6	0.33	0.67	1.00	0.33	0.50	0.20	0.08	3.12
PI-b	6	0.42	0.50	0.92	-0.08	0.00	-0.25	-0.02	1.48
PI-c	10	0.60	0.80	1.00	0.42	0.10	0.20	0.19	3.31
I1-a	8	-0.06	0.06	0.04	0.08	0.38	0.31	0.00	0.23
I1-b	9	1.00	0.06	0.67	0.09	0.33	0.00	0.16	2.30
I2-a	6	0.33	0.75	0.48	0.00	0.00	0.00	-0.05	1.52
I2-b	2	-1.50	-0.50	0.75	-0.75	0.00	-0.50	-0.05	-2.55
I3	6	-0.08	0.33	1.18	-0.58	0.17	-0.50	0.17	0.68
Adv.	6	-0.17	0.17	0.97	-0.25	-0.08	0.00	0.30	0.93
Kanji	7	0.86	0.36	0.47	0.00	-0.29	0.00	0.40	1.80
平均	N=94	0.40	0.72	1.14	0.09	0.13	0.01	0.14	2.59

5 コースの分析と考察

5-1 漢字関係コースの分析と考察

まず、PIコースのうち漢字学習に重点を置いた「PI-a」と上級者対象の「特別漢字コース」について見る（cf.文野 1995；星野 1995）。どちらのコースも漢字あるいはWRITINGに重点をおいて学習したいとQUESTIONNAIREで答えた学生が対象であり、COMP.の低い学生がPI-aに、高い学生が特別漢字コースに入った。

再び〔表5〕「コース別・プレースメント・テスト及びプロダクション・テスト平均値」について見ると、「PI-a」は、プレースメント・テストのRWV.が他の二つのPIのクラスよりもかなり低いが、COMP.とAURAL、特にAURALは他のクラスよりもかなり高い。プロダクション・テストにおいても、「受益」を除いてすべて他のPIクラスよりも高く、そのうち「視点」「間接受身」「てしまう」「名詞修飾節」はI1とI2の間のレベルである。AURALや「視点」「間接受身」の得点が高いのは、日本滞在期間2年の外国人学生が2名と日系人が2名いたからだと思われる。〔表7〕によると、特に間接受身は、日本滞在期間との相関係数が0.507であり、他の項目に比べてかなり高いと言える。

特別漢字コースのRWV.はI1とI2の間で、COMP、AURALはともにI3とADVの間である。プロダクション・テストの各項目の平均値はかなり散らばっているが、

すべての項目において特別漢字コースの方がP I - aより高い。

また、P I - aはプロダクション・テストの各項目に比べてCOMP.が落ちるが、これはRWV.が示すように「読み書き」の能力が低いため、実際の構文力がプレースメント・テストに反映されていない可能性がある。プロダクション・テストで見る限り構文力としてはI 1、I 2の力がある。これらの点から、今年度このクラスをP I コースの中に設ける必然性はなかったと言える。学生は日系人が2名で、あとの4名は外国人である。一方、特別漢字コースに入ったのは、ほとんどが帰国学生（日本人）や日系人であった。この二つのコースの学生は前述したように、COMP.がかなり違う。二つのコースの違いは、P I - aの学生はまだ十分「読めない」のに対し、特別漢字コースの学生は「読めるが書けない」と言えそうである。

一昨年まで特別漢字コースが「話せるが書けない」タイプをすべて扱っていたのを昨年から現行の二つのコースで扱うようになった。これで、従来の特別漢字コースは中級後半から上級の学生のみを対象として「書く」ことに集中できるようになり、目標設定もしやすくなったようである。その半面、今年度、P I - aは各技能の能力が極端にアンバランスな学生—またアンバランスを生み出した背景が様々である学生—を抱え込むことになりその対処が難しかったようである。 今後は、「漢字コース1」「漢字コース2」のようなコース名にして希望者のみを対象とし、応募段階でそれが明確になるようにする。「漢字コース1」と「漢字コース2」を分ける基準を漢字コース担当で決めておき（COMP.の得点のみで分けるのではなく）、コース判定会議の際には他のコースから切り離して検討するのがよいと思われる。

5-2 P I コースの分析と考察

ここでは、先に漢字関係コースで取り上げたP I - a以外の中級準備コース、P I - b、P I - cについて考察する。P I - b、P I - cを一緒にしたコース別プレースメント・テストの比較[表5]ではコース判定に問題はない。P I - b、P I - cのほうがB 3よりも高く、I 1よりも低い。P I - bとP I - cを分ける基準はCOMP.の得点で、低い学生をP I - bに高い学生をP I - cに分けたと言う(大野 1995 ; 藤原 1995)。

次に、P I コース周辺のクラス別の比較[表11]を見ると、COMP.は確かにP I - bがB 3よりもかなり高いが(34.31 : 27.50)、プロダクション・テストの結果を見ると、「計」ではP I - cとP I - bの差が大きく(22.41 : 18.17)、またP I - bはB 3とほとんど変わらない(18.17 : 17.45)。筆者自身の「全体印象点」ではP I - bはB 3よりも低くなっている(22.22 : 24.55)。

それでは、P I - bの6週間の日本語の伸びはどうであろうか。[表9]を見るとP I のコース全体では自然な伸びを示しているのだが、これを[表10]のクラス別に見ると、

〔表11 クラス別 アレースメント・テスト及びプロダクション・テスト 平均値〕

クラス	n	アレースメント・テスト			プロダクション・テスト						
		COMP	RWV	AURAL	複文	視点	間接受身	受益	てしまう	全体印象点	計
B2	11	17.27	15.96	15.45	6.36	1.82	5.23	0.00	0.00	3.18	3.41
B3	22	27.50	25.30	27.88	37.27	2.73	5.11	23.86	0.00	24.55	17.45
PI-a	6	44.58	37.59	52.22	50.00	16.67	14.58	25.00	16.67	33.33	28.58
PI-b	9	34.31	46.79	23.33	40.00	10.00	5.56	15.00	0.00	22.22	18.17
PI-c	11	40.34	35.25	38.48	43.64	5.45	10.23	35.45	9.09	27.27	22.41
I1	17	50.22	46.73	49.02	60.00	9.41	9.56	44.12	11.76	39.41	30.85

P I - b は他の初級コースやP I の他のクラスに比べて伸びが小さい。さらに、P I - b はCOMP.ではB 3 よりはるかに高いにもかかわらず（〔表1 1〕）、再テストを受けた学習者のみを対象としたプロダクション・テストの1 回目・クラス別平均を見ると、1 回目からB 3 よりかなり低い（〔表1 2〕）。他の項目はまだこの段階では全体的にできていないからそう差はないが、「複文」を生成する力が弱い（B 3 - a : 1. 8 3、B 3 - b : 2. 1 7、P I - b : 1. 6 7）。再テストでも「計」を見ると、P I - b はB 3 より低い（〔表1 3〕）。

〔表12 1 回目 クラス別 プロダクション・テスト平均値〕

クラス	n	複文	視点	間接受身	受益	てしまう	名詞/副詞節	全体印象点	計
B2	10	0.35	0.05	0.18	0.00	0.00	0.00	0.07	0.65
B3-a	12	1.83	0.08	0.25	0.75	0.00	0.46	0.53	3.90
B3-b	6	2.17	0.17	0.00	0.25	0.00	0.25	0.47	3.30
PI-a	6	2.50	0.83	0.58	0.50	0.17	0.47	0.67	5.72
PI-b	6	1.67	0.17	0.17	0.33	0.00	0.25	0.28	2.87
PI-c	10	2.30	0.30	0.45	0.73	0.10	0.25	0.58	4.71
I1-a	8	3.19	0.44	0.50	0.88	0.00	0.50	0.81	6.31
I1-b	9	2.83	0.50	0.28	0.89	0.22	0.56	0.77	6.04
I2-a	6	3.25	0.75	1.37	0.83	0.17	0.33	1.05	7.75
I2-b	2	4.25	1.50	1.00	1.00	0.00	0.50	0.90	9.15
I3	6	3.58	1.33	0.92	1.75	0.33	1.00	1.30	10.22
Adv.	6	4.17	3.25	2.42	1.17	0.42	0.33	1.52	13.27
Kanji	7	2.64	1.43	1.07	1.07	0.86	0.57	1.11	8.76
平均	N=94	2.45	0.69	0.62	0.74	0.16	0.40	0.72	5.78

〔表13 2 回目 クラス別 プロダクション・テスト平均値〕

クラス	n	複文	視点	間接受身	受益	てしまう	名詞/副詞節	全体印象点	計
B2	10	1.35	0.50	0.45	0.50	0.10	0.25	0.29	3.44
B3-a	12	2.54	2.38	3.42	0.88	0.25	0.46	0.76	10.68
B3-b	6	1.58	1.92	3.00	0.50	0.00	0.00	0.37	7.37
PI-a	6	2.83	1.50	1.58	0.83	0.67	0.67	0.75	8.83
PI-b	6	2.08	0.67	1.08	0.25	0.00	0.00	0.27	4.35
PI-c	10	2.90	1.10	1.45	1.15	0.20	0.45	0.77	8.02
I1-a	8	3.13	0.50	0.54	0.94	0.38	0.81	0.81	6.54
I1-b	9	3.83	0.56	0.94	0.98	0.56	0.56	0.92	8.34
I2-a	6	3.58	1.50	1.85	0.83	0.17	0.33	1.00	9.27
I2-b	2	2.75	1.00	1.75	0.25	0.00	0.00	0.85	6.60
I3	6	3.50	1.67	2.10	1.17	0.50	0.50	1.47	10.90
Adv.	6	4.00	3.42	3.38	0.92	0.33	0.33	1.82	14.20
Kanji	7	3.50	1.79	1.54	1.07	0.57	0.57	1.51	10.56
平均	N=94	2.85	1.40	1.76	0.83	0.30	0.41	0.86	8.37

P I - b では S C J L 期間中に「条件節」「受身」「使役」「使役受身」などの復習をしたそうだが、その成果が今回の再テストに反映されていない。そこで、P I - b の学生についてもう少し詳しく見てみることにする。個人データを見ると、再テストを受けた P I - b 6 名のうち 4 名が中国系である。彼らは R W V は当然高いが、A U R A L が低いというアンバランスな能力のために P I コースに入ったものと考えられる（[表 1 1] 参照）。彼らの文生成力が低いとプロダクション・テストで判定されたのは実はプレースメント・テストの C O M P の得点が実際の能力よりも高く出たからではないだろうか（注 6）。これは前述の漢字に弱い P I - a の学生と丁度逆になる。つまり、C O M P は総合的な理解力を測るものであるが、「読み」（「漢字」を含めて）の力に負うところがかなり大きいと考えられるのである。P I - b のコース目標は本来文法強化であった。そういった意味では文生成力の低い学生には合っていたわけだが、実際に集まった学生は文法よりも「話す」ことに重点を置くことを望んだと言う（大野：1995）。コース判定会議では、A U R A L が弱いので P I コースに判定されたわけだが、実際には A U R A L だけではなく文生成力も低かったと言える。そして学習者自身に文法や構文が弱いという自覚やそれを補強しようという意識がなかったと考えられる。P I - c の学生が伸びたのはクラスが目標が「話す」ことに重点を置くものであり学生の希望に合致していたことに加え、学生の能力がそれに見合っていた（C O M P も文生成力も P I - b より高い）からであろう。仮に P I - b で「話す」ことに重点を置いても基礎能力が十分でないので P I - c のように伸びたとは限らない。P I - b に集まった学生が真の意味での Pre - intermediate の学生であり、これまでも何度か問題となり対応の難しかったレベルである（注 7）。数年前より、B 3（初級の最後のレベル）、I 1（中級の最初のレベル）から切り離して P I ができたわけだが、今年度もやはり問題を残した。なぜ文法の習得状況が悪いのか、なぜ能力がアンバランスなのかは個人による要素が強く（母語、学習背景、学習スタイル、動機等）、それをまとめてアンバランスなグループとして面倒を見るのには無理があったと言えるだろう。ここでは、学習背景、学習スタイル等個人に強く関わる要素については検討できないが、母語に関しては、漢字圏と非漢字圏という大きなグループ分けをして検討することが可能である。最後に、S C J L の学習者を漢字圏と非漢字圏に分けて分析する。

6 漢字圏学習者と非漢字圏学習者別分析

先に P I - b の中国系の学習者の問題点について触れたが、ここではプレースメント・テストの得点を漢字圏の学習者と非漢字圏の学習者に分けて分析する。これまで漢字圏の学習者と非漢字圏の学習者についての分析は I C U においては石田（1982, 1985）によって行われているが、それ以後、少なくともこの数年使用されてきた現行

のプレースメント・テストにおいては分析されていない。そこで、本稿で、125名の受験者をQUESTIONNAIREに記入された母語に基づいて漢字圏と非漢字圏に分け、レベル別分析を試みる。

まず初めに〔表14〕は、漢字圏学習者（31名）、非漢字圏学習者（94名）別にプレースメント・テストのCOMP.、RWV.、AURALの平均値、標準偏差、分散分析（一元配置）による平均値の差の検定結果を示したものである。これによると、COMP.はCOMP.によってレベル分けがなされているので差はないが、RWV.は漢字圏全体の平均値：非漢字圏全体の平均値が52.72：42.35（100%換算）で有意な差がある（ $p < .05$ ）。一方、AURALは、漢字圏全体の平均値：非漢字圏全体の平均値が39.46：45.96（100%換算）と逆に非漢字圏が高いが、統計的に有意な差はない。

〔表14 漢字圏全体及び非漢字圏全体の平均値、標準偏差〕

	n	COMP.平均	標準偏差	RWV.平均	標準偏差	AURAL平均	標準偏差
漢字圏全体	31	48.02	20.09	52.72	22.24	39.46	21.84
非漢字圏全体	94	47.54	20.57	42.35	20.07	45.96	21.65
検定結果		ns		*		ns	

* $p < .05$

次にこれをレベル別に見てみる。〔表15〕〔表16〕は、漢字圏と非漢字圏の学習者を6レベルに分けた際の下位テスト、COMP.、RWV.、AURALの平均値、標準偏差、分散分析による平均値の差の検定結果である（〔図5〕参照）。各レベルの対象（n）は少ないが、RWV.、AURAL別にみても、RWV.では、L2（ $p < .01$ ）及びL4（ $p < .05$ ）で漢字圏と非漢字圏の学習者の得点間に有意な差がある。一方、AURALでは、L4で有意（ $p < .05$ ）、L2及びL3で有意傾向が認められた。

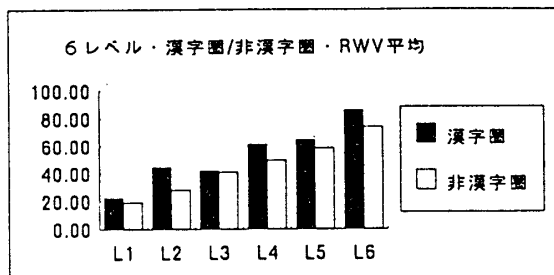
〔表15 レベル別 漢字圏／非漢字圏 プレースメント・テスト 平均値及び標準偏差〕

漢字圏／非漢字圏	Level	n	COMP平均	標準偏差	RWV平均	標準偏差	AURAL平均	標準偏差
漢字圏	L1	4	20.94	4.25	22.22	11.26	21.67	15.99
	L2	7	30.54	3.30	44.29	13.78	22.86	12.08
	L3	4	39.38	0.72	41.67	22.19	29.17	6.87
	L4	9	56.25	3.59	61.23	14.15	45.19	12.48
	L5	4	67.19	3.73	64.72	17.05	55.83	18.73
	L6	3	86.25	2.17	86.30	5.25	76.67	23.33
漢字圏全体の平均値		N=31	48.02		52.72		39.46	
漢字圏全体の標準偏差				20.09		22.24		21.84
非漢字圏	L1	15	18.83	3.88	19.04	13.70	21.11	14.07
	L2	17	31.91	2.87	27.91	8.69	31.76	11.19
	L3	22	43.18	3.15	40.96	9.57	41.97	13.67
	L4	20	56.56	3.14	49.61	10.65	55.83	12.37
	L5	10	70.88	3.34	58.56	14.41	68.33	14.76
	L6	10	85.38	4.49	74.22	15.20	74.00	15.54
非漢字圏全体の平均値		N=94	47.54		42.35		45.96	
非漢字圏全体の標準偏差				20.57		20.07		21.65
全体の平均値			47.66	20.37	44.92	21.02	44.35	21.79

[表16 レベル別 漢字圏/非漢字圏 RWV. & AURAL 平均値及び検定結果]

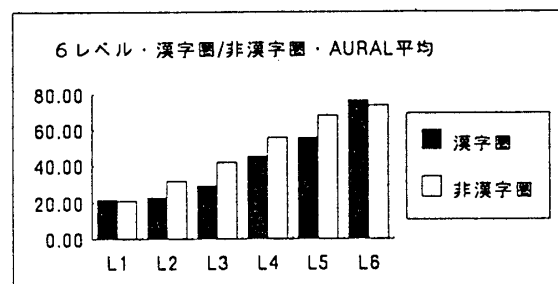
RWV.

Level	漢字圏	非漢字圏	検定結果
L1	22.22	19.04	ns
L2	44.29	27.91	**
L3	41.67	40.96	ns
L4	61.23	49.61	*
L5	64.72	58.56	ns
L6	86.30	74.22	ns



AURAL

Level	漢字圏	非漢字圏	検定結果
L1	21.67	21.11	ns
L2	22.86	31.76	(ns)
L3	29.17	41.97	(ns)
L4	45.19	55.83	*
L5	55.83	68.33	ns
L6	76.67	74.00	ns



* p<.05 ** p<.01 (ns) p<.1

[図5 レベル別 漢字圏・非漢字圏 RWV. & AURAL 平均値]

これらの結果により、COMP.の得点が同じレベルの学習者では、RWV.の得点は漢字圏が非漢字圏より有意に高く、AURALの得点は有意差はないが非漢字圏が漢字圏より高い傾向のあることが分かる。また、全体に初級のL1と上級のL6及びその下のL5においては漢字圏・非漢字圏の差が小さく、L2～L4の初級後半から中級において差が認められる。

6レベル別のRWV.とAURALを見ると、今回L2の漢字圏と非漢字圏でその差が大きい。前述の「PI-b」はこのL2に含まれる。さらにL2の個人別データを調べても、RWV.とAURALの差が大きかった。つまり、このレベルは個人別にも日本語能力がアンバランスであり、またコース全体でも漢字圏と非漢字圏の差が大きいと言える。一方、RWV.においてもAURALにおいても同様に漢字圏と非漢字圏の差が大きいとみなされるL4においては今回コース運営上の問題点はなかったようである。

再びL2に戻ると、RWV.では今回漢字圏のL2とL3の平均値が逆転しており、このことはこのレベルの学習者のアンバランスな能力を示すとともに、漢字圏の学習者をCOMP.を基準にコース分けをした場合に、RWV.はレベルと共に上昇しない可能性のあることを示している。そこで、漢字圏学習者間と非漢字圏学習者間別に、レベル間に差があるかどうか調べてみた。F検定の結果、漢字圏学習者間全体と非漢字圏学習者間全体に有意差があった。次に、多重比較 (Tukey HSD Multiple Comparisons) を行った。その結果、RWV.では[表17]が示すように非漢字圏学習者間においては、L2-L3間及びL5-L6間を除く、隣接したレベル間では有意差はなかったが、一つ離れたレベル

間ではすべてに有意差があった。しかし、漢字圏学習者間においては二つあるいは三つ離れたレベル間でも差がなかった。AURALでは、非漢字圏学習者間においてはL 3 - L 4 以外の隣接したレベル間では差はないが、一つ離れたレベル間ではすべて有意差があった。しかし、漢字圏学習者間においては二つレベルが離れても差がなく、三つ離れたレベル間で有意傾向、L 1 - L 5 において初めて有意差があるという結果であった。

[表17 漢字圏／非漢字圏 RWV. & AURAL レベル間の多重比較]

漢字圏 RWV.							非漢字圏 RWV.						
	L 1	L 2	L 3	L 4	L 5	L 6		L 1	L 2	L 3	L 4	L 5	L 6
L 1	-						L 1	-					
L 2	ns	-					L 2	ns	-				
L 3	ns	ns	-				L 3	***	*	-			
L 4	*	ns	ns	-			L 4	***	***	ns	-		
L 5	(ns)	ns	ns	ns	-		L 5	***	***	**	ns	-	
L 6	**	**	*	ns	ns	-	L 6	***	***	***	***	*	-

漢字圏 AURAL							非漢字圏 AURAL						
	L 1	L 2	L 3	L 4	L 5	L 6		L 1	L 2	L 3	L 4	L 5	L 6
L 1	-						L 1	-					
L 2	ns	-					L 2	ns	-				
L 3	ns	ns	-				L 3	***	ns	-			
L 4	(ns)	(ns)	ns	-			L 4	***	***	*	-		
L 5	*	***	ns	ns	-		L 5	***	***	***	ns	-	
L 6	***	***	**	*	ns	-	L 6	***	***	***	**	ns	-

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001 (ns) p<.1

Tukey HSA Multiple Comparisons
Matrix of Pairwise Comparison Probabilities

以上の分析により、本ブレースメント・テストはCOMP.を基準とした場合に非漢字圏学習者をレベル分けするにはRWV.、AURALとも妥当であるが、漢字圏学習者の場合にはRWV.、AURALの能力がレベル別にならない可能性のあることが明らかになった。したがって、今後、対象人数を増やして漢字圏学習者・非漢字圏学習者別に下位テストの項目分析を行ない、問題を検討する必要がある。また、現行ではCOMP.を基準とし他の下位テストの得点や総合得点は参考にする程度であるが、レベル判定の方法や基準についても再検討しなければならないだろう。

7 おわりに

漢字圏学習者・非漢字圏学習者別分析からも、アンバランスな能力をもつ学習者がL 2 に集まりやすいことが明らかになった。今年度のS C J Lのコース・カリキュラムの反省として、来年度はP I コースをCOMP.の得点の高低で分けるのではなく、同じ傾向のアンバランスな能力を持つ学生を同じクラスに集め、弱点を補強していくことが考えられる。

ただし、結果的には漢字圏と非漢字圏の学習者を分けることになり、このことが学習者の心理面にどう影響を及ぼすか、また教育的効果が上がるのかも定かではない。例えば混合クラスでは同じクラスの発音の上手な学習者から学ぶというような機会も多いわけで、お互いに学び合うという教育的見地から考えると実行に少しためらいもある。しかし、同じように漢字圏と非漢字圏の差が大きかったが特に問題とはならなかったL4と比較すると、今年度のL2の学生にはまだお互いに学び合うという余裕はなかったようである。漢字圏と非漢字圏の混合クラスでクラス運営が難しかったというデメリットの方が大きかったようであるから、来年度アンバランスな能力別のクラス編成を試みる価値はあるだろう。また、PI（"Pre" Intermediate）という呼び名がこの不安定なグループを心理的により一層不安にしているのではないかという懸念があったが（大野 1995；文野 1995）、これに関しては、来年度以降すべてのコースの名称を変更し、初級レベルからC1、C2、C3のように通しでコース名を付けることになった（注8）。

漢字関係コースに関しては、PI-aはPIコースからはずし、独立した「漢字コース1（中級）」と「漢字コース2（上級）」にするのがよいだろう。

プレースメント・テストに関しては、COMP.に漢字圏の学習者の「読み」の力が関与している可能性と、逆に「読めない」学習者の構文力がCOMP.に反映されない可能性のあることがプロダクション・テストとの比較から分かった。基準関連妥当性、構成概念妥当性といった点からも、今後こうした他のテストとの相関を調べていく必要がある。また、RWV.及びAURALについては、漢字圏の学習者をCOMP.の得点を基準にレベル分けを行った場合に、その能力が必ずしもレベル順にならないことが漢字圏・非漢字圏別の分析によって明らかになった。

ICUの日本語教育は夏期日本語教育を含め、歴史的には非漢字圏の学習者を対象とすることでその名を知られてきたが、漢字圏の学習者もかなり前から増えてきている。しかし、今回のプレースメント・テスト及びプロダクション・テストの結果の分析により、今年度のSCJLでのコース編成においてもプレースメント・テスト自体においても、その対応が十分でないことが分かった。SCJLのみでなく通常の学期のコースにおいても漢字圏・非漢字圏という面からの学習者に対する配慮、プレースメント・テストの検討が早急に必要であろう。

〔注〕

（1）本稿では、各レベルをコースと呼ぶ。SCJLでは原則として1コースの学生数が15名を超えた場合にはコースを2つに分ける。その分けた方をクラスと呼ぶ。クラスはコースによって目的別であったり、全く同じ内容を学習する場合もある。

（2）日本人帰国学生対象のレベルで、別のプレースメント・テストを受け、その結果に

より特別日本語I、II、IIIを履修するか、あるいは日本語学習を完全に免除される。今年度のSCJLにもこのレベルの学生が3名入っていたので、日本語能力の分析の対象からははずした。

(3) 漢字のプロダクション・テストに関しては尾崎(1995)を参照されたい。

(4) 1994年度SCJLのプレースメント・テストの詳細については田中(1995b)を参照されたい。

(5) 伸びは、口頭ではなく筆記の場合の文生成に関する伸びであり、今回が初めての試みなので測定方法もどこまで客観性を持ちうるか定かではない。また、プロダクション・テストの伸びがその学習者の日本語能力の伸びを表すものではないこともここにことわっておく。口頭発表に重点を置いたクラスでは口頭発表能力が伸びているものと思われる。

(6) 阿久津他(1992)p. 8に『漢字力診断テスト』(500字レベル)の結果を見ると、漢字圏の学習者は、単漢字・漢字熟語の読み書きの力に比べ、意味理解や部首・字形の認識の力が高いことがわかる。総合的な日本語力の非常に低い者でも、意味理解や部首・字形の認識については、高得点を上げることができる。これは、母国語における漢字の知識が日本語学習において有利に働くことを示している。」とある。

(7) PIのレベルに関しては、これまでに山下・田中・池田(1991)、鈴木(1992)、大野(1995)、田中(1995b)等で論じられている。

(8) 1995年度以降、SCJLはSCJ(Summer Courses in Japanese)と名称を改め、コース名はSCJが日本語教育研究センター(Center)の主催なので、C1、C2、C3のように呼ばれることに決まった。

[謝辞]

本稿を執筆するに当たり、テストや統計処理に関して村上隆先生(名古屋大学)並びにDr. Thrasher, Randolph H.(ICU語学科)に御指導、御助言を賜った。また、プロダクション・テストの全体印象点の算出にあたっては3名の先生方の御協力を得た。さらに、編集委員の方々からも貴重な助言をいただいた。記して感謝の意を表したい。

[追記]

(1) 本稿中のプロダクション・テストは平成5年度～7年度文部省科学研究費補助金一般研究(C)課題番号05680243の研究の成果の一部である。

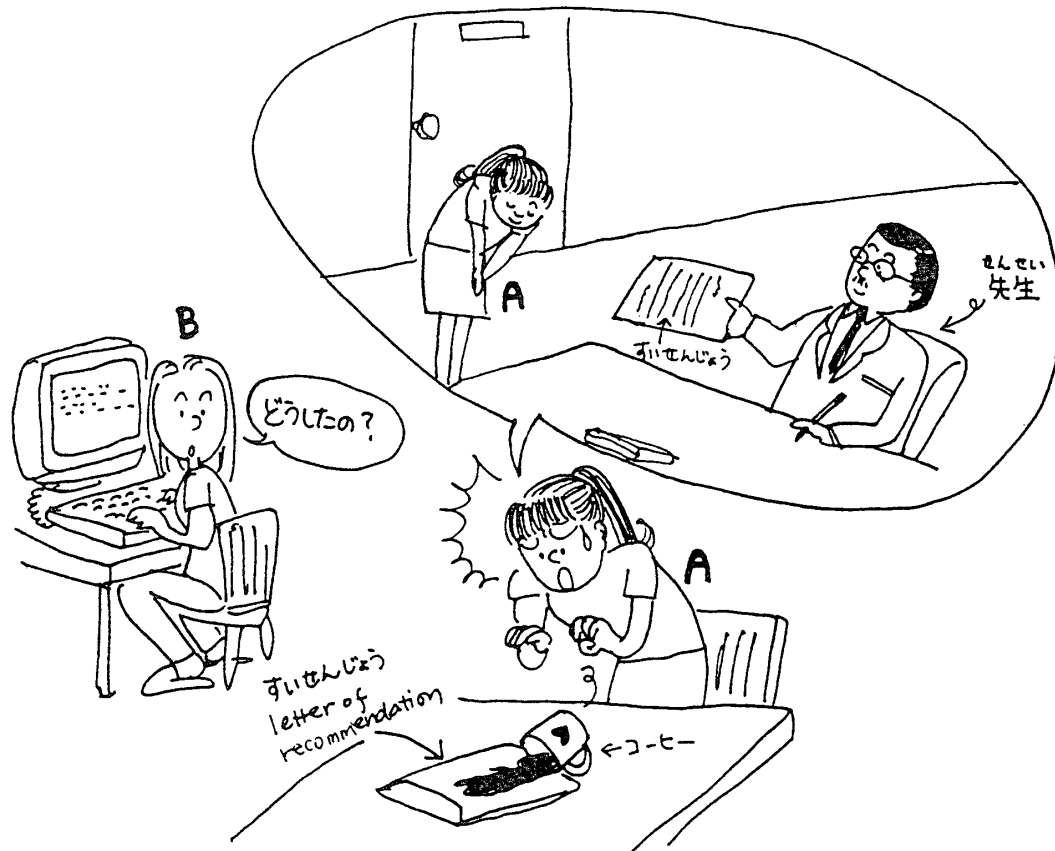
(2) プロダクション・テストに使用した絵は大野春見氏による。

(3) 本稿中のプレースメント・テスト及びプロダクション・テストのデータの使用についてはICU夏期日本語教育委員会の方の了承を得た。

[参考文献]

- 阿久津智、清水百合、加納千恵子、谷部弘子、石井恵理子（１９９２）「中級漢字の指導法－漢字圏・非漢字圏の学生に対する指導の違いを中心に－」『平成４年度 日本語教育学会秋季大会予稿集』pp. 7－12
- 石田敏子（１９８２）『非漢字系外国人および帰国学生別日本語能力診断方法の開発』昭和55, 56年科学研究費補助金（一般研究C）研究成果報告書
- 石田敏子（１９８５）『外国人学習者の日本語学力構造の解明』昭和57, 58, 59年科学研究費補助金（一般研究C）研究成果報告書
- 大野春見（１９９５）「１９９４年 中級準備コース（Pre.1）Sec.Bコース報告」『ICU夏期日本語教育論集11』pp. 72－78
- 尾崎久美子（１９９５）「プロダクションテスト（漢字）報告」『ICU夏期日本語教育論集11』pp. 36－39
- 鈴木庸子（１９９２）「１９９２年 中級準備コース 報告書」『ICU夏期日本語教育論集9』pp. 44－61
- 田中真理（１９９５a）「第二言語習得における複文生成」『ICU40周年記念論集 日本語教育の課題』pp. 149－176
- 田中真理（１９９５b）「94年度夏期日本語教育における問題点と今後の課題」『ICU夏期日本語教育論集11』pp. 20－35
- 田中真理、館岡洋子、田部井圭子（１９９４）「中・上級日本語学習者の『ねじれ文』について－実態調査とプロセス調査から－」『平成６年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp. 31－36
- 藤原恵美（１９９５）「１９９４年度 中級準備コース（Pre.1）Sec.C コース報告」『ICU夏期日本語教育論集11』pp. 79－83
- 文野峯子（１９９５）「１９９４年 中級準備コース Aセクション 報告書」『ICU夏期日本語教育論集11』pp. 64－71
- 星野修子（１９９５）「夏期日本語教育 特別漢字クラス報告」『ICU夏期日本語教育論集11』pp. 122－125
- 山下早代子・田中真理・池田裕（１９９１）「短期集中講座のプレースメントに現れる問題点の考察～初級から中級にかけて～」『ICU夏期日本語教育論集8』pp. 81－104
- 国際交流基金（１９９４）『日本語能力試験の概要 1993年版』
- 日本語教育学会（１９９１）林大（代表編）『日本語テストハンドブック』

[資料1]



絵：大野春見